

パスパとパクパ

吉池孝一

一

『元史』列伝の巻第八十九「釈老」に「蒙古新字」とあるのは、いま我々がパスパ文字と呼ぶ文字のことである。チベット仏教の僧パスパにより創製されたため、近代以降はパスパの作った文字ということでパスパ文字と称する。パスパはチベット文語（固定した歴史的な綴りによる書面語）でふつうにはhPhags-pa（聖なる）と綴られ、その漢字音写としては「抜合思巴」「八思巴」などがある。文語のhPhags-paが、当時のチベット語でどのように発音され、どのような経緯で既存の漢字音写ができたかが問題となる。

なお、チベット文語とそれに対応する現代語の音はだいぶ離れているようで、hPhags-paのばあい、語頭のhは措くとして、第一音節末尾の二重子音gsに当たる部分をどの様に読むか、方言により出入りがある。現代チベット語の諸方言を見ると、康定という所の方言では[-ks]となるけれども（注1）、大勢としては[-k]もしくは[-ʔ]（アッの小さなッに当たる詰まった音）となるか、それともまったく発音されないか、ということのようである（注2）。政治や文化の中心地ラサ（拉薩）はどうかというと、-gsは環境によって[-k]ともなり[-ʔ]ともなる。二音節語の初めにある場合は[-k]と発音されるのが通例のようだ（注3）。hPhags-paの場合、-gsは初めの音節にあるので、ふつうには[-k]となり、全体としては「パクパ」のように発音される。それで、「パスパ文字」のことを「パクパ文字」とも呼ぶことになる。

おなじラサ方言でも、文献によっては、いずれの環境にあっても[-ʔ]とするものもある（注4）。これはどういうことかよく分からないが、或いはラサにおいては音節末の[-k]は消失の傾向にあるのかもしれない。もっとも、調査の質の違いが音声表記に反映しているだけかもしれない、独立した複数の調査資料で確認する必要がある。

二

hPhags-paは、ラサの現代チベット語でふつうには「パクパ」と読まれるわけであるが、元代にはどのように発音されたのであろうか。問題の解決の糸口として漢字による表記がある。以下に幾つか例をあげる。まず、元代の碑文に「抜合思巴」「抜合思把」と音写する例がある（注5）。「巴」と「把」は声調が違うだけであるからこの二つは同種である。明代に作られた『元史』には「八合思八」とする方式と「八思巴」とする方式の二種があるという（注6）。単純に見比べる限りでは、前者の「合思」は-gsに相当し、後者の「思」だけのものは-gsのgが表記されていないように見えるけれども、先ずは漢字音写の「抜合思巴」「八合思八」や「八思巴」などが、直接チベット語音に基づいているものか、中国語もしくはモンゴル語のなかで訛って発音されていたものを表記したものか、つまりどの程度に原音を反映しているかを見極めなければならない。そうはいつても、文献に散見するこの種の個別的な例の成り立ち知ることはなかなか困難である。試行錯誤しながら進むしかない。

ただ、明代の書物に『西蕃館訳語』（東洋文庫蔵本）というものがあり、考える方向

を示してくれる。この書はチベット語の単語を漢字で音写した単語集である。これまでの研究によるとチベット文語を比較的良く反映したアムド方言であるらしい（注7）。

『西蕃館訳語』は通訳や翻訳の実践に供したものであろうから、たとえ口語そのものではないにしろチベット語として発音可能な音形が記されていると見て良からう。それによると、hPhags-paは「恩怕克思罷」とある。「ンパクスパ」[Nphaks-pa]のように発音されたわけである（注8）。現在のラサのチベット語ではふつうには音節末尾の「ス」は発音されず「パクパ」のようになるけれども、『西蕃館訳語』では「一クスー」と発音されていたことがわかる。

### 三

問題は、時代を遡った元代の状況である。明代の資料にあるように、「ンパクスパ」[Nphaks-pa]と発音されたのであろうか。方言の違いの問題もあり、『西蕃館訳語』をそのまま元代のチベット語に結びつけるわけにはいかない。しかしながら、元代の少林寺聖旨碑に「抜合思巴」と刻されたものがある。これによると、語頭の鼻音の問題は措くとして、やはり「パクスパ」のように「ク」も「ス」も発音されたと考えた方がよさそうである。もっとも、「抜合思巴」の「合」は、hPhags-paのgに対応しており、音が合わないように見える。「合」の発音は現代北京語で摩擦音の[xə]、時代を遡った元代北方の発音でも[ho]のように再構成される。その声母は摩擦音である（注9）。他方、hPhags-paのgは、現代チベット語諸方言の対応によるかぎり、時代を遡ってもやはり何らかの破裂音であったと推定できる。そうであるならば、漢字音は摩擦音、チベット語音は破裂音ということで両者の間には齟齬が生じる。しかしこれは、-agsのgが、喉の奥で発音される破裂音つまり口蓋垂音の[g]だと当時の音訳者に見なされたため、摩擦音があてられたのである。音節初頭であれ音節末であれ、口蓋垂の破裂音[g]を、喉の摩擦音で漢字音写するのは元明代のモンゴル語に見られる通例である。元代の『至元訳語』（蒙古訳語ともいう）は、モンゴル文語のγaǰar（地）にあたる語を「合掣兒」と表記する。これは音節初頭の口蓋垂破裂音の[g-]を摩擦音の[h-]で音写した例である。音節末については次の通りである。『至元訳語』では音節末の[-g]はふつう表記されないため、先に紹介した元代の少林寺聖旨碑から例を挙げる。本碑には「八合失」（バクシという称号）とある。バクシはパスパ文字でbaqši（注10）と記されるもので、この場合のパスパ文字の-qは口蓋垂の破裂音[-g]であるから、それが「合」という摩擦音で記されていることになる。（注11）。

当時の漢字音写の方式として、口蓋垂の破裂音に、摩擦音の声母を持つ漢字を当てるといふものがあり、いずれかの段階で、「パクスパ」のように発音されたhPhags-paのgがモンゴル語の口蓋垂の破裂音と同一視され、その結果「合」をあてたということであろう（注12）。

### 四

チベット文語のhPhags-paは「パクスパ」のように音節末子音のクスを伴って発音された。そしてそのチベット語音を直接音写して「抜合思巴」という表記ができた。たしかにその可能性はある。その他に、hPhags-paのチベット語音をモンゴル語風に訛った発音があり、それを漢字音写して「抜合思巴」という表記ができた、とする考えも可能である。

hPhags-paは {子音+子音+母音+子音(1)+子音(2)+子音(3)+ 母音} となっている。それで、子音(1)+子音(2)は-gsにあたる音節末の二重子音である。問題はこの二重子音をモンゴル語としてどのように受け入れたかということである。当時のモンゴル語の二重子音の状況は次のとおりである。パスパ文字モンゴル語碑文ではチベット語やサンスクリット語の翻字及び「arslan (lion)」「bars (tiger)」に二重子音-rsが見られる(注13)。漢字音写モンゴル語の『元朝秘史』でも「巴児思(虎)」と「阿児思闌(獅子)」に二重子音-rsがみられる(注14)。音節末の二重子音は-rsに限られ僅か二語に止まる。この書かれた文献の状況が言葉音を反映するとしてよいならば、当時のモンゴル語には-rs以外音節末の二重子音はなかったことになる。もしそうであるならば、-gsという二重子音を自然なモンゴル語として発音する場合、二重子音を避けるために母音を添加することとなろう。-gsのsに何らかの母音を添加し、「s+母音」を一音節として「Phag」「s母音」「pa」とする。これを漢字音写すると「抜合/思/巴」となる。この場合、「思」は音節末音ではなく母音を伴った音節である。もう一つの方法として、-gsのgに母音を添加し、「g+母音+s」を一音節として「Pha」「g母音s」「pa」とするものがある。これを漢字音写すると「抜/合思/巴」となる。この場合、「合」は母音を伴った口蓋垂音で、「思」は音節末子音である。

このように、母音添加の法は二種可能であるけれども、「思」は元・明初を通して音節末音の[-s]のみに使われることからみて、「Pha」「g母音s」「pa」、つまり「抜/合思/巴」と発音されたと見る方が穏当であろう。この「抜合思巴」の例が含まれている元代少林寺碑にはウイグル文字モンゴル語も一緒に刻されている。それによると、「パスパ」は、P'XYSP' (ba γ isba) とあり、これに漢字音写の「抜合思巴」をあてる(注15)。ba γ isba を ba / γ is / ba のように三音節とし、γの直後に母音のiを補っている。iと転写されるウイグル文字のYは「僧」[səŋ]などの主母音ともなることからみて、[i]の他に、γの後では多少緩んだ中舌母音[i]をも担っていた可能性はあるが、とりあえず[i]と表記すると、hPhags-paのモンゴル語訛りの発音は[ba gis ba]のようなものであったことになる。これを「抜/合思/巴」と音写したわけである。

なお、hPhags-paの明代『西蕃館訳語』の音は[Nphaks-pa]であり、語頭のPhにあたる破裂音は無声帯気音[ph-]となっている。ふつうには元代も無声帯気音であったはずである。モンゴル語の固有語に[ph-]に当たる音がなかったため、これを訛って[b-]として受け入れ、[ba gis ba]と発音した。そのため、漢字音写は「怕」[ph-]のような無声帯気音を使用せず、無声無気音[p-]の「抜」(中古音では濁音の[b-])を使用したのである。この漢語の[p-]がチベット語の[ph-]と合わないという不都合な事実は、漢字音写がモンゴル語訛りのチベット語に拠ったとする説にとって有利である。

## 五

次は「八思巴」という表記である。やはり、チベット語音に直接基づいたとする立場と、モンゴル語の訛り音に基づいたとする二つの立場が可能である。

チベット語音に直接基づいたとは次のようなことであろう。元代と明代初期を含めて考えると、漢字による外国語音の音写には二つのタイプがあった。それは、音節末の子音[-g][-g][-d]を表記するものと、表記しないものである。明代初期の『華夷訳語』(甲種本)や『元朝秘史』の漢字音写は表記するタイプである。それに対して、元代の

『至元訳語』の漢字音写は表記しないタイプである。幾つか例を挙げる(注16)。モンゴル文語のbulaγ(泉)は『華夷訳語』(甲種本)では「不刺黒」であるが、『至元訳語』では口蓋垂音の[-g]は表記されず「布刺」とある。同様に、モンゴル文語のčečeg(花)は『華夷訳語』(甲種本)では「扯扯克」であるが、『至元訳語』では軟口蓋音の[-g]は表記されず「掣掣」とある。[-d]についても同様なので省略する。もっとも、簡略表記の『至元訳語』でも、問題の音節末の破裂音が語中で表記された例が一つある。モンゴル文語のaγta(騙馬)を『元朝秘史』で「阿黒塔」、『至元訳語』で「阿忽荅」とする。これは「忽」で音節末の[-g]を表記した例である。なぜ語末で表記されず、語中では表記される場合があるのかというと、{子音(1)+子音(2)+母音}の場合、後ろの子音(2)が母音とともに発音されることにより直前の子音の聞こえが大きくなるためであろう。『華夷訳語』(甲種本)や『元朝秘史』ではモンゴル語の音を精密に表記しようとしたが、『至元訳語』では聞こえの小さな音節末の子音は表記されなかった。語末の破裂音[-g][-g][-d]は特に聞こえが小さく例外なく表記されず、語中の破裂音は聞こえが幾らか大きくなるため表記されたということであろう。明代後期の訳語類では、ふたたび『至元訳語』式の簡略表記の音写が行われることとなる。

音節末の[-s]や[-r]は、破裂音とは振る舞いが異なる。語中であつても語末であつても、いずれの資料でもしっかりと表記される。モンゴル文語のjes(銅)は、『華夷訳語』(甲種本)で「輒思」、『至元訳語』で「折四」となる。「思」と「四」で[-s]を表記する。「思」や「四」の母音はこの頃までには緩んだ母音を持つ[si]となっており、音節末の[-s]の表記に適していた。[-r]の例を一つ挙げる。モンゴル文語のγajar(地)は、『元朝秘史』で「合札児」(表記の一部省略)、『至元訳語』で「合掣児」となる。「児」の音はこの頃までには現代語の[a]のようなものとなっており、音節末の[-r]の表記に適していた。両者とも調音の持続時間が比較的長い摩擦的騒音で、聞こえは破裂音の[-g][-g][-d](実際には無声無気音の[-q][-k][-t]に近い音)よりも大きかったはずである。

以上を要するに、hPhags-paのチベット語音の内、聞こえの小さな-gは表記されず、聞こえの比較的大きな-sが表記され「八思巴」となった。これは『至元訳語』方式の簡略表記の伝統につながるもの、ということができる。

## 六

「八思巴」という表記につき、モンゴル語の訛り音に基づいているという立場からの説明も可能である。先に述べたように、hPhags-paは、モンゴル語訛りで[ba gis ba]と三音節で発音され、「拔/合思/巴」という表記ができた。これは比較的原音に近い訛りによったものである。そのほかに、子音のgを落とすことによって二重子音を避けた訛りもあった。それが[basba]である。この多少ぞんざいな呼び方は次第にひろく用いられるようになり、「八思/巴」と漢字音写されることとなり定着した。

なお、「拔合思巴」の「拔」と同様に、「八思巴」の「八」は無声無気音[p-]であり、この漢語の[p-]がチベット語の[ph-]と合わないという不都合な事実は、漢字音写がモンゴル語訛りのチベット語に拠ったとする説にとって有利である。

## 七

チベット語音に直接拠ったとすると、「拔合思巴」は『華夷訳語』(甲種本)や『元

朝秘史』のような精密表記の方式からできたもので、「八思巴」は『至元訳語』のような簡略表記の方式からできたものということになる。モンゴル語の訛り音に拠ったとすると、「抜合思巴」は比較的原音に近い訛りからできたもので、「八思巴」は多少ぞんざいな訛りからできたものということになる。

当時の状況よりみて、音訳者が、hPhags-paのチベット語音に直接触れる機会よりも、モンゴル語を通してパスパの名に触れる機会の方がはるかに多かったであろうこと、「抜合思巴」と「八思巴」の「抜」「八」がチベット語音よりもモンゴル語音に合うということより、私はモンゴル語の訛り音に拠って「抜合思巴」と「八思巴」ができたのだろうと想像している。

## 注

- 1) 西田龍雄1970,『華夷譯語研究叢書 I 西番館譯語の研究』松香堂、288頁。
- 2) 蔵緬語語音和詞彙編寫組1991,『蔵緬語語音和詞彙』中国社会科学出版社。華侃主編2002,『蔵語安多方言詞彙』甘肅民族出版社。以上二書を参照。
- 3) 蔵緬語語音和詞彙編寫組1991。
- 4) 華侃主編2002中のラサ方言。
- 5) 中村 淳・松川 節1993,「新発見の蒙漢合璧少林寺聖旨碑」『内陸アジア言語の研究』VIII, pp. 1-92+8pls.
- 6) 中村 淳・松川 節1993のpp. 73-74.
- 7) 西田龍雄1970。
- 8) 西田龍雄1970, 112頁および117頁。
- 9) 藤堂明保編1978,『学研漢和大事典』学習研究社による。
- 10) Poppe,N.1957,*The Mongolian Monuments in Hp'ags-pa Script*,Second Edition translated and edited by J.R.Krueger,Wiesbaden.
- 11) バクシについては、1235年の「重陽萬壽宮聖旨碑」にも「八合識」とある。蔡美彪1955,『元代白話碑集録』北京：科学出版社。3頁と4頁。
- 12) 西田龍雄1970に、明代チベット語の-ag<sub>s</sub>のgが口蓋垂音の[q]であろうとの指摘がある。「nags 納克思 林、bubs cig ト不思治 一副・・・（一部省略）・・・のように、-gsに対しては克思「khes<sub>1</sub>」が、-bsに対してはト思（マ）「pus<sub>1</sub>」が使われる。したがって、末尾閉鎖音と-sの連続は-ks,-psとして保存されていたことになる。前者は、漢字表記から実際には「-qs」であった可能性が大きい。」64頁。
- 13) Poppe,N.1957のGlossaryによる。
- 14) 栗林 均・确精扎布編著2001,『『元朝秘史』モンゴル語全単語・語尾索引』東北アジア研究センター。
- 15) 中村 淳・松川 節1993.
- 16) 長田夏樹1953,「元代の中・蒙対訳語彙「至元訳語」」『神戸外大論叢』第4巻2・3号。今は『長田夏樹論述集（上）』ナカニシヤ出版、2000年、pp. 15-64による。